

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第241集

芝宮遺跡群

下曾根遺跡X

長野県佐久市小田井下曾根遺跡X発掘調査報告書

2016.12

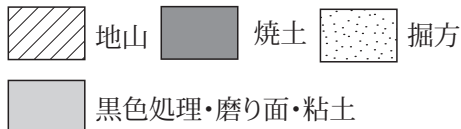
佐久市教育委員会

例 言

- 1.本書は、株式会社トラックスが行う社屋建築に伴う芝宮遺跡群下曾根遺跡Xの発掘調査報告書である。
- 2.調査原因者 株式会社 トラックス 代表取締役 早川多津男
- 3.調査主体者 佐久市教育委員会
- 4.遺跡名および所在地 芝宮遺跡群 下曾根遺跡X(OSS X)
佐久市小田井字39-1 他
- 5.調査期間及び面積 平成28年4月5日～4月18日(現場作業)
平成28年4月19日～ (報告書作成作業)
386㎡
- 6.調査担当者 富沢一明 上原 学
- 7.本書の編集・執筆は富沢が行った。
- 8.本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1.遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・ピット(P)である。
- 2.挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
- 3.遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
- 4.土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
- 5.挿図中のスクリーン・トーンは以下のことを示す。



調査状況(南より)

目 次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

- 1.経過と立地
- 2.調査体制
- 3.調査日誌
- 4.遺構・遺物の概要
- 5.標準土層
- 6.調査の方法

第Ⅱ章 遺構と遺物

- 1.竪穴住居址
- 2.土 坑
- 3.ピット列・単独ピット
- 4.調査の成果

遺物観察表

写真図版

抄 録



第1図 下曾根遺跡X位置図(1:50000)

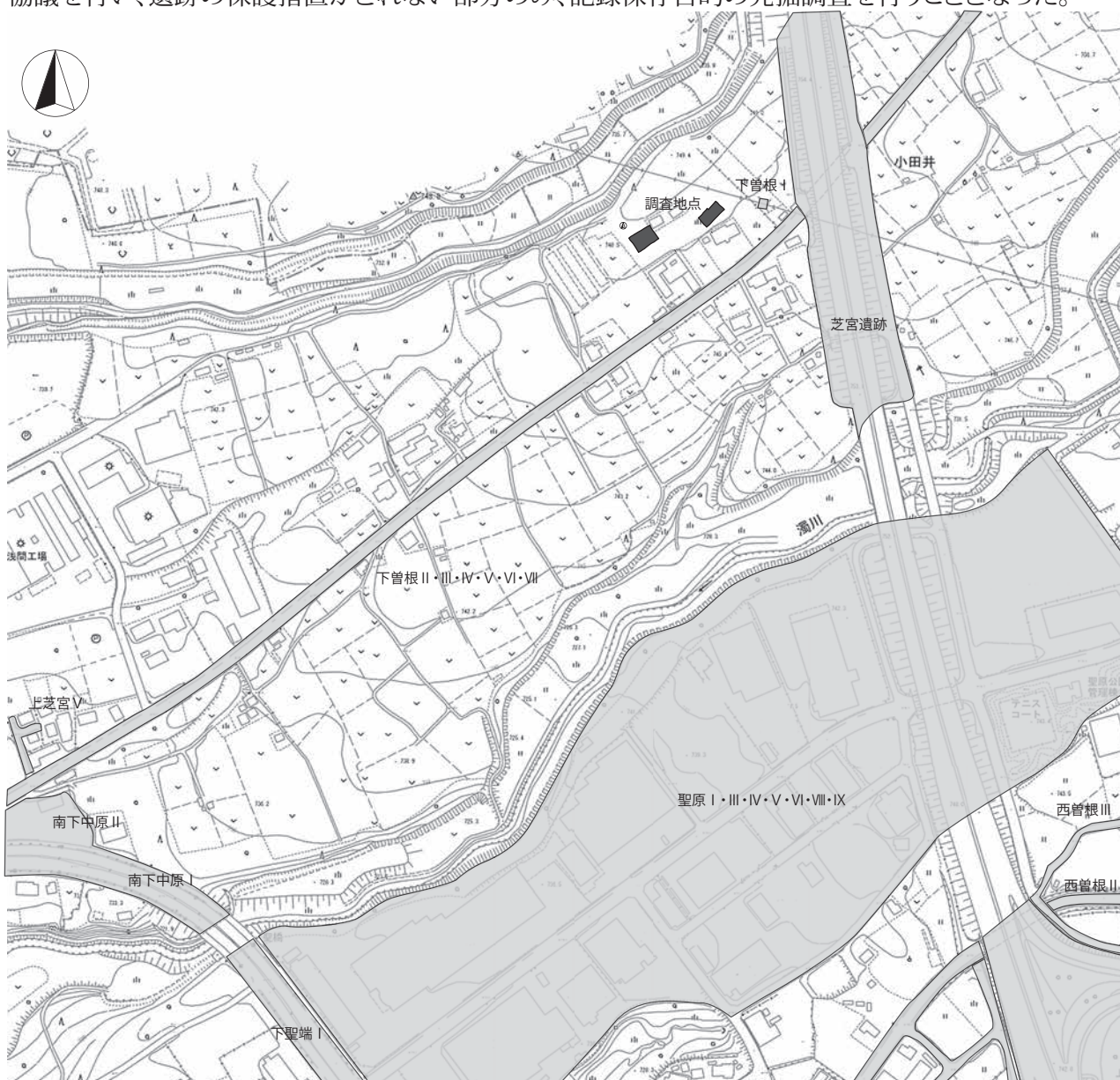
第 I 章 発掘調査の経緯

1.経過と立地

下曽根遺跡Xは、佐久市の小田井地籍に所在し、芝宮遺跡群の中ほどに位置する。遺跡は、佐久平北部にみられる「田切り地形」の台地上に立地し、台地周辺の海拔は750m前後を測る。

本遺跡の周辺では、数多くの遺跡が調査されている。調査区に接して東西に延びる市道は、平成6年～12年度にかけて発掘調査がなされ、古墳時代から古代を中心とした集落跡が発見されている。発見された遺構は竪穴住居115軒、掘立柱建物跡42棟等があった。また、東側を通過する上信越自動車道の発掘調査では、同じく古墳時代から古代にかけての大規模な集落跡が検出され、「海獣葡萄鏡」等が発見されている。

今回、遺跡群内で、株式会社トラックスにより社屋建築の計画がなされ佐久市教育委員会に文化財保護法93条の届出がなされた。当教育委員会では対象地の試掘調査を行い遺構が発見された為、保護協議を行い、遺跡の保護措置がとれない部分のみ、記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。



第2図 周辺遺跡位置図(1:10000)

2.調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹
事務局	社会教育部長	荻原幸一	
	文化振興課長	三石 建	
	企画幹	小林登志郎	
	文化財調査係長	大塚広樹	
	文化財調査係	小林眞寿 富沢一明 上原 学 神津一明 生島修平	

調査担当	富沢一明	上原 学				
調査員	赤羽根篤	浅沼勝男	甘利隆雄	岩松茂年	木内修一	堺 益子
	中澤 登	羽毛田利明	橋詰勝子	橋詰信子	横尾敏雄	依田好行
	柳澤孝子	渡辺 学	岩崎重子	加藤ひろ美	林 まゆみ	堀籠保子

3.調査日誌

平成28年1月8日 株式会社トラックスより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
1月12日 長野県教育委員会へ市教育委員会より27佐教文振第1331-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
1月18日 長野県教育委員会より27教文第7-1291号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
1月8・9日 市教育委員会により試掘調査を行う。
2月22日 株式会社トラックスより埋蔵文化財発掘調査の概算調査費の見積について依頼。
3月16日 市教育委員会より見積もり回答
4月 1日 株式会社トラックスと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
4月5～15日 開発対象地の発掘調査を行う。
4月18日 埋蔵文化財の発見届を佐久警察署に行く。
5月 9日 長野県教育委員会より文化財認定がなされる。

4.遺構・遺物の概要

遺 構	竪穴住居址 11軒(古墳・奈良・平安)	ピット列 1基	土 坑 8基
遺 物	土師器・須恵器(坏・蓋・甕・壺・甑)	石製品(磨石・叩き石)	石製模造品(白玉)
	鉄製品(鉄鏝)		

5.標準土層

今回の調査地点は南西側に僅かに傾斜する田切台地上で、基本層序は3層に分かれ、Ⅲ層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より30～50cmほどであった。

第Ⅰ層	10YR5/1 褐灰色土	耕作土しまり弱い。
第Ⅱ層	10YR2/1 黒色土	軽石粒を多く含む。
第Ⅲ層	10YR6/8 明黄褐色土	P1層で上部に漸移層あり。



6.調査の方法

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

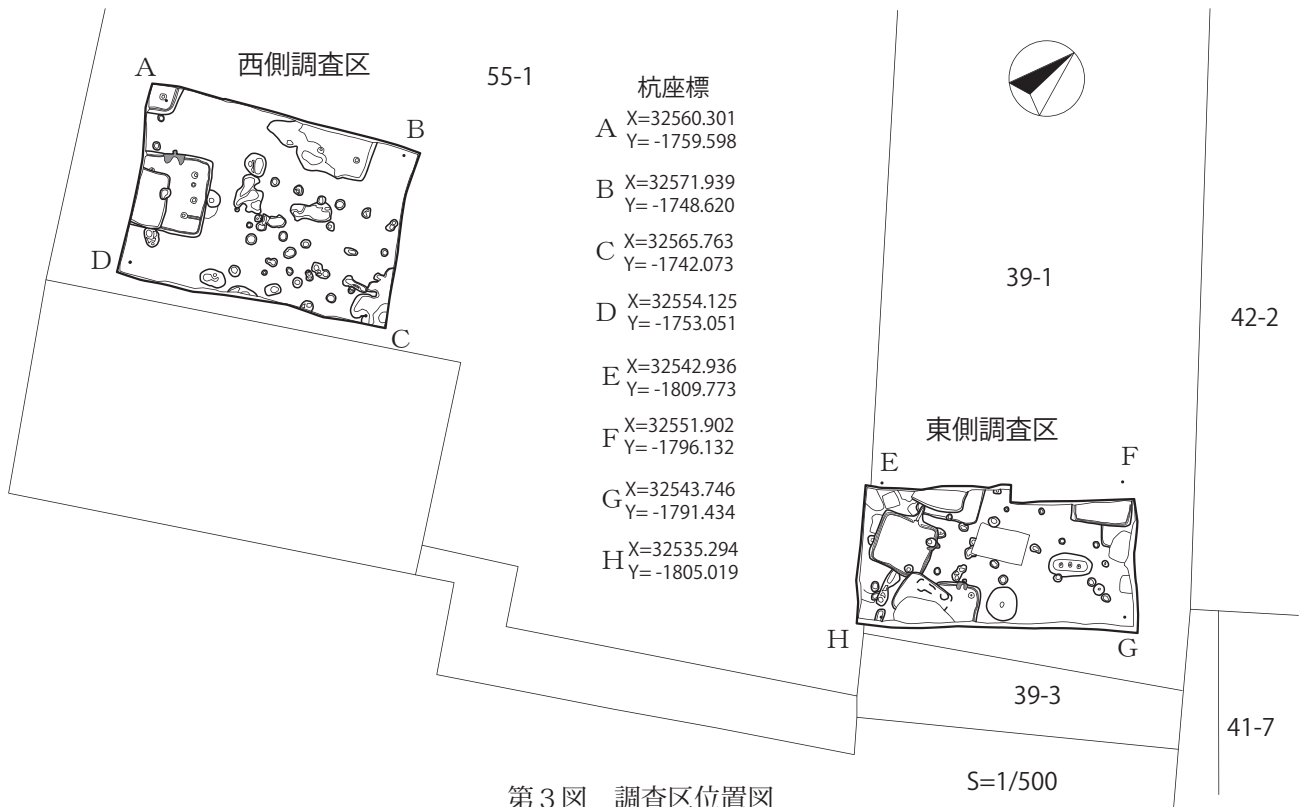
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

報告書

文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



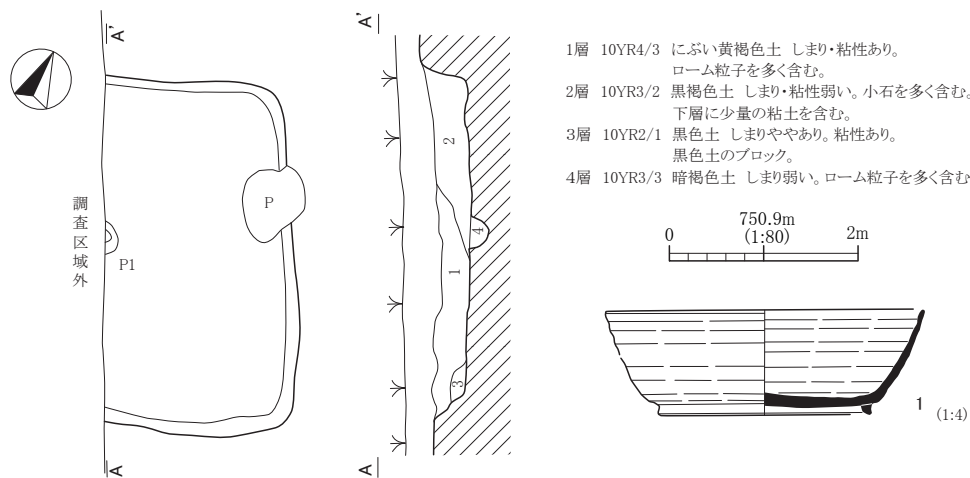
第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) H1号住居址

本址は西側調査区西端で検出された。形態は方形と考えられるが西側が調査区外となり不明である。規模は、東壁長3.54m・北壁の検出長1.70m・南壁の検出長1.95mである。床面積は検出部分で6.53㎡を測る。壁深さは最大0.44mを測る。住居主軸方位はN-28°-Wと推定される。床は全体に軟質で、踏み固められたような床であった。調査区域外となる北壁付近で床面上に少量の焼土と粘土が確認された。このことから、本址は、北壁にカマドが構築されていると考えられる。本址からはピットが1か所検出された。規模は径0.32m・深さ0.20mを測る。

本址からの出土遺物は少量であったが、図示した須恵器高台坏が覆土から出土した。口縁部を欠損するがほぼ全容を把握できる資料である。本址からの出土遺物は少なく不確実な要素もあるが、図示した須恵器高台坏の特徴から、本址は8世紀代に位置づけられると考える。



第4図 H1号住居址及び出土遺物実測図

(2) H2号住居址

本址は西側調査区西端で検出された。形態は方形と考えられる。西側が一部調査区域外となる。規模は、東壁が5.06mで北壁が検出長4.40m、南壁が4.54mである。床面積は検出部分で22.50㎡を測る。壁深さは北東コーナーで最大0.54mを測る。住居主軸方位はN-29°-Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。検出された壁部分には壁溝が巡っていた。ピットは8か所で検出された。P1～P4は支柱穴と考えられる。各ピットの規模はP1が径0.45m・深さ0.48m、P2が径0.33m・深さ0.62m、P3が径0.47m・深さ0.67m、P4が径0.37m・深さ0.60mを測る。

カマドは北壁中央部に構築されており、煙道部と支脚石が残存していた。袖部は礫と粘土により構築され火床部はよく焼けていた。住居掘方は南壁周辺のみ一段深く掘り込まれていた。

本址からの出土遺物は多く、15点を図示した。1は須恵器蓋であり、摘み部が欠損している。2は須恵器高台坏であり、見込み部が非常に研磨されている。3～5は土師器坏であり、3はいわゆる「須恵器模倣坏」の一種である。5は形態から「皿」とすべきかもしれない。6～9は土師器甕である。いずれも底部が欠損している。6はカマド脇から出土した。6.7.9はいわゆる「武蔵甕」と捉えられるものである。10は土師器球胴甕の底部と考えられる。



第5図 H2号住居址出土遺物実測図(1)

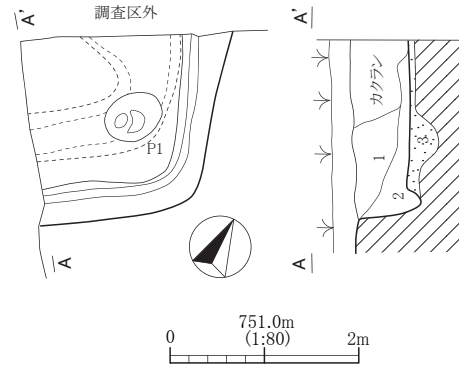
11～13は滑石製の白玉である。11と13は欠損している。14は鉄鏝と考えられる。薄い板を打ち抜いたような状態で、刃部は五角形をている。5は用途不明な鉄製品であるが、断面形から鉄鏝の柄部分とも考えられる。

本址はこれらの出土遺物から、古墳時代後期(7世紀代)の所産と考えられる。

(3) H3号住居址

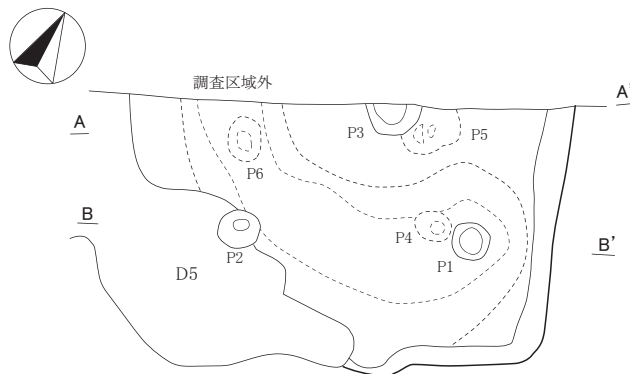
本址は西側調査区北西端で検出された。形態は住居南東コーナー部のみの検出で、大部分が調査区域外となるため詳細は不明である。規模は、検出部分で東壁1.80m・南壁1.56mである。壁深さは北側調査区で最大0.62mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居主軸方位は推定でN-21°-Wを示す。床は全体に硬質で、貼床が施されていた。検出された壁部分には壁溝が巡っており、深さ0.10～0.13mを測る。ピットは1か所検出された。P1の規模は径0.60m・深さ0.63mを測る。また、本址の掘方は壁際が一段深く掘り込まれた形状であった。

本址からの出土遺物は少量であり図示できるものは無かったが、土師器甕片14点が出土した。これらはいずれも小片であるが、古墳時代後期の特徴をそなえるものであり、本址の所産時期は古墳時代後期の可能性が指摘できる。

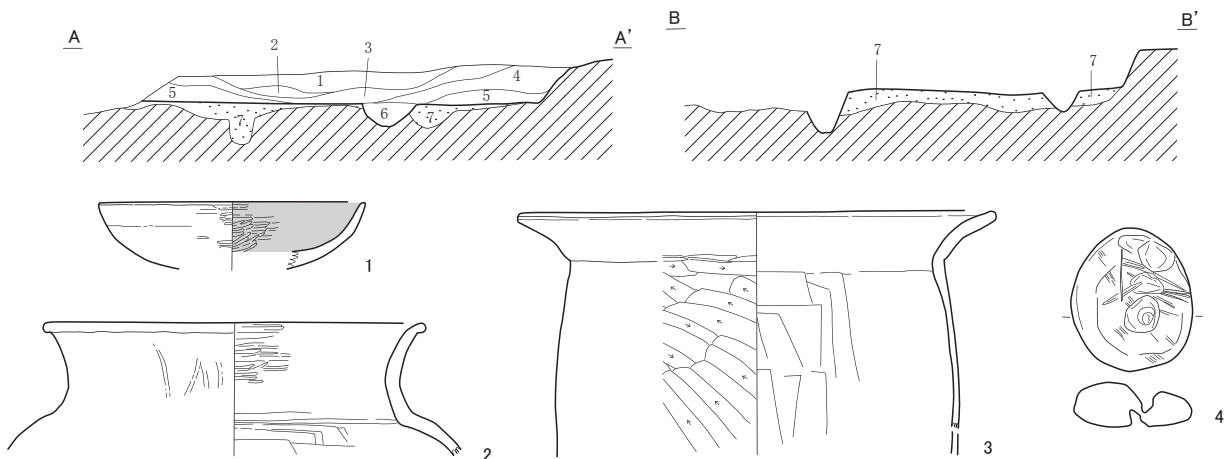


- 1層 10YR4/4 褐色土 しまり・粘性あり。ロームブロックを多く含む。
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり。ロームブロックを少量含む。
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 しまりあり。上面硬質化し、ロームブロックを多く含む。

第7図 H3号住居址実測図



- 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土・炭化物を含む。
- 2層 10YR3/4 暗褐色土 焼土・炭化物・軽石を含む。
- 3層 10YR2/3 黒褐色土 焼土・炭化物・軽石を含む。
- 4層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭化物・軽石を含む。
- 5層 10YR4/4 褐色土 ローム・ロームブロックを多く含む。焼土を含む。
- 6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム・炭化物を含む。
- 7層 10YR3/3 暗褐色土 しまり・粘性ややあり。ロームブロック・白色粒子を多く含む。



1～4 (1:4)

第8図 H4号住居址及び出土遺物実測図

(4) H4号住居址

本址は西側調査区北端で検出された。D5号土坑と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は方形と考えられるが、北側の半分が調査区域外となるため詳細は不明である。規模は、検出部分で東壁2.68m・南壁1.95mである。壁深さは南東コーナーで最大0.36mを測る。住居主軸方位は推定でN-19°-Wを示す。床は中央部分が硬質で、貼床が施されていた。ピットは6か所検出された。P1とP2は検出位置より支柱穴と考えられる。規模はP1が径0.40m・深さ0.21m、P2が径0.40m・深さ0.45m、P3が径0.57m・深さ0.19m、P4が径0.34m・深さ0.23m、P5が径0.66m・深さ0.46m、P6が径0.50m・深さ0.24mを測る。住居址掘方は壁際が一段深くなる掘方であった。

本址からの出土遺物は少量であったが4点を図示した。1は土師器坏で内面に黒色処理が施されている。2と3は土師器甕で、3はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。4は軽石製の石製品である。両面から穿孔を施しているが、貫通していない。用途は形態から錘等と考えられる。

本址の所産時期は、図示した遺物の内、1と2が覆土中、3は掘方埋め土内からの出土であるため、3の土師器甕の特徴より、奈良時代(8世紀代)と考えられる。

(5) H5号住居址

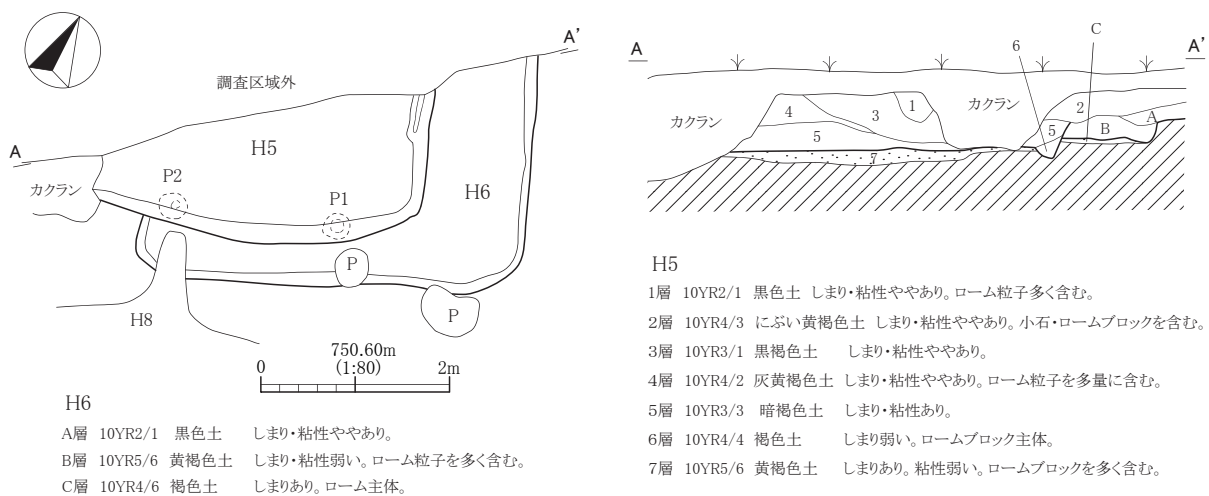
本址は東側調査区北端で検出された。形態は北側の大部分が調査区域外となるため詳細は不明である。規模は、東壁が検出長1.80m・南壁が残存長3.30mを測る。壁深さは南側で最大0.38mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。住居主軸方位は推定でN-24°-Wを示す。床は全体に硬質で、貼床が施されていた。東壁の一部には壁溝が巡っていた。ピットは掘方検出時に2か所検出された。規模はP1が径0.25m・深さ0.12m、P2が径0.28m・深さ0.20mを測る。

本址からの出土遺物は少量で土師器坏片1点、土師器甕片8点、須恵器蓋片1点があったが、いずれも小片で図示できるものはなかった。よって本址の所産時期は不明である。

(6) H6号住居址

本址は東側調査区北端で検出された。形態は北側の大部分が調査区域外となるため詳細は不明である。H5号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。規模は、南壁が3.90m、東壁が検出長2.21m・西壁が残存長0.50mを測る。壁深さは南東コーナーで最大0.36mを測る。住居主軸方位は推定でN-24°-Wを示す。床は全体に軟質で、貼床が施されていた。ピットは確認されなかった。

本址からの出土遺物はH5号住居址同様に少量で土師器坏片4点、土師器甕片14点、須恵器坏片2点があったが、いずれも小片で図示できるものはなかった。よって本址の所産時期は不明である。

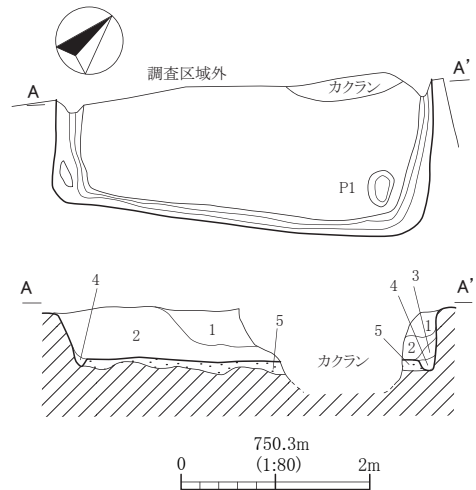


第9図 H5・6号住居址実測図

(7) H7号住居址

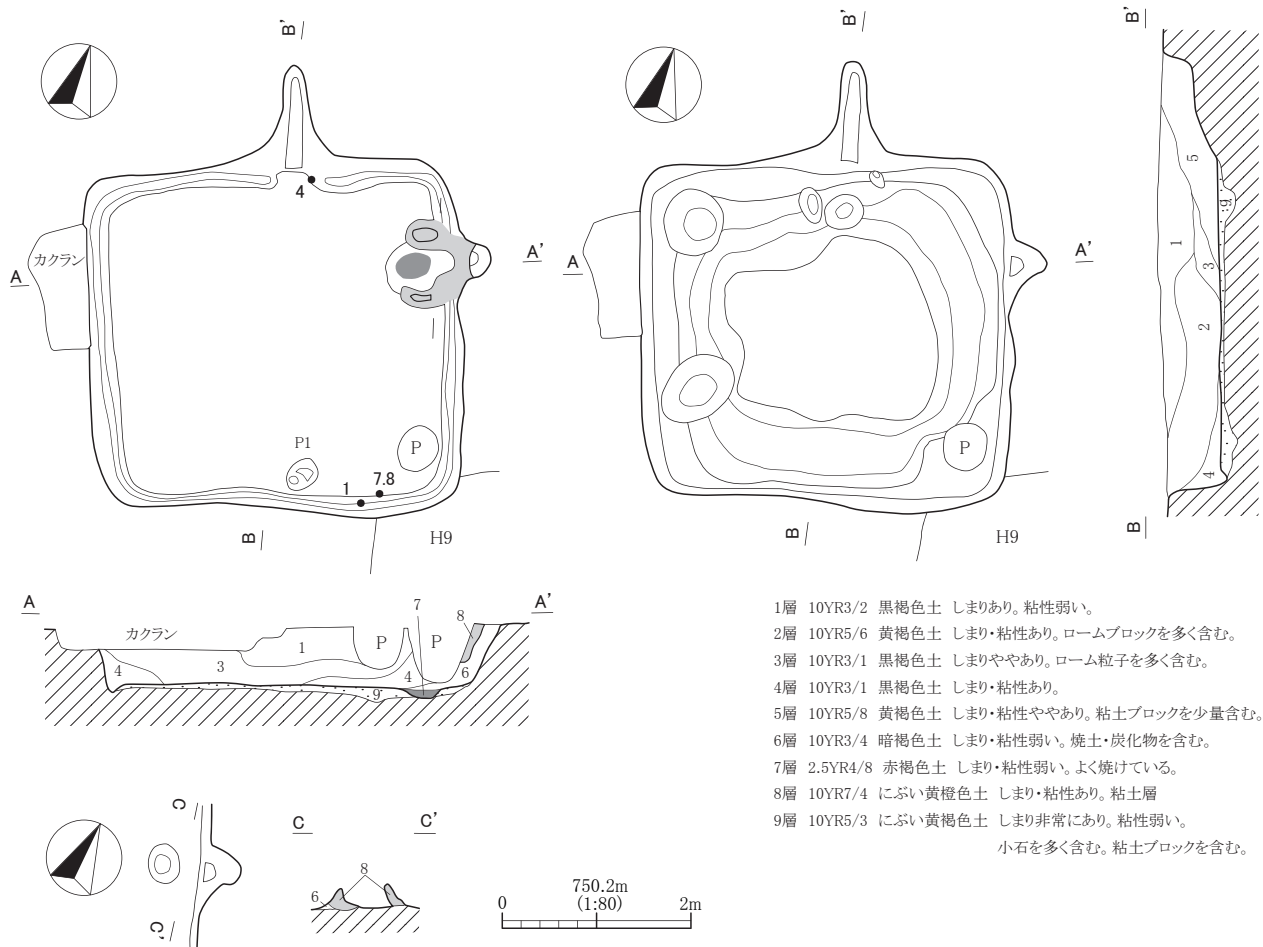
本址は東側調査区の北東端で検出された。H11号住居跡と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形と考えられるが、北側の大部分が調査区域外となるため詳細は不明である。規模は、南壁が3.70m、東壁と西壁は検出部分で東壁1.60m・西壁1.00mを測る。床面積は検出部分で4.42㎡を測る。壁深さは南西コーナー部で最大0.46mを測る。住居主軸方位は推定でN-32°-Wを示す。床は全体に硬質で、貼床が施されていた。また、検出された壁部分には壁溝が巡っており、深さ0.07mを測る。ピットは1か所が検出された。P1の規模は径0.38m・深さ0.03mを測る。

本址からの出土遺物は少量であり図示できるものはなかったが、覆土からいわゆる「有段口縁坏」と呼ばれる土師器坏の破片や内面に叩き技法の残る土師器甕の破片が出土している。これらの出土遺物から、本址は古墳時代後期の所産と推定される。



- 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまり・粘性ややあり。ロームブロックを含む。
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり。1層に比べロームブロックを多く含む。
- 3層 10YR7/2 にぶい黄橙色土 しまり・粘性あり。白色粒子を多く含む。
- 4層 10YR4/4 褐色土 しまり・粘性弱く、ローム土主体。
- 5層 10YR4/4 褐色土 しまり・粘性あり。黒色土ブロックを含む。

第10図 H7号住居址実測図



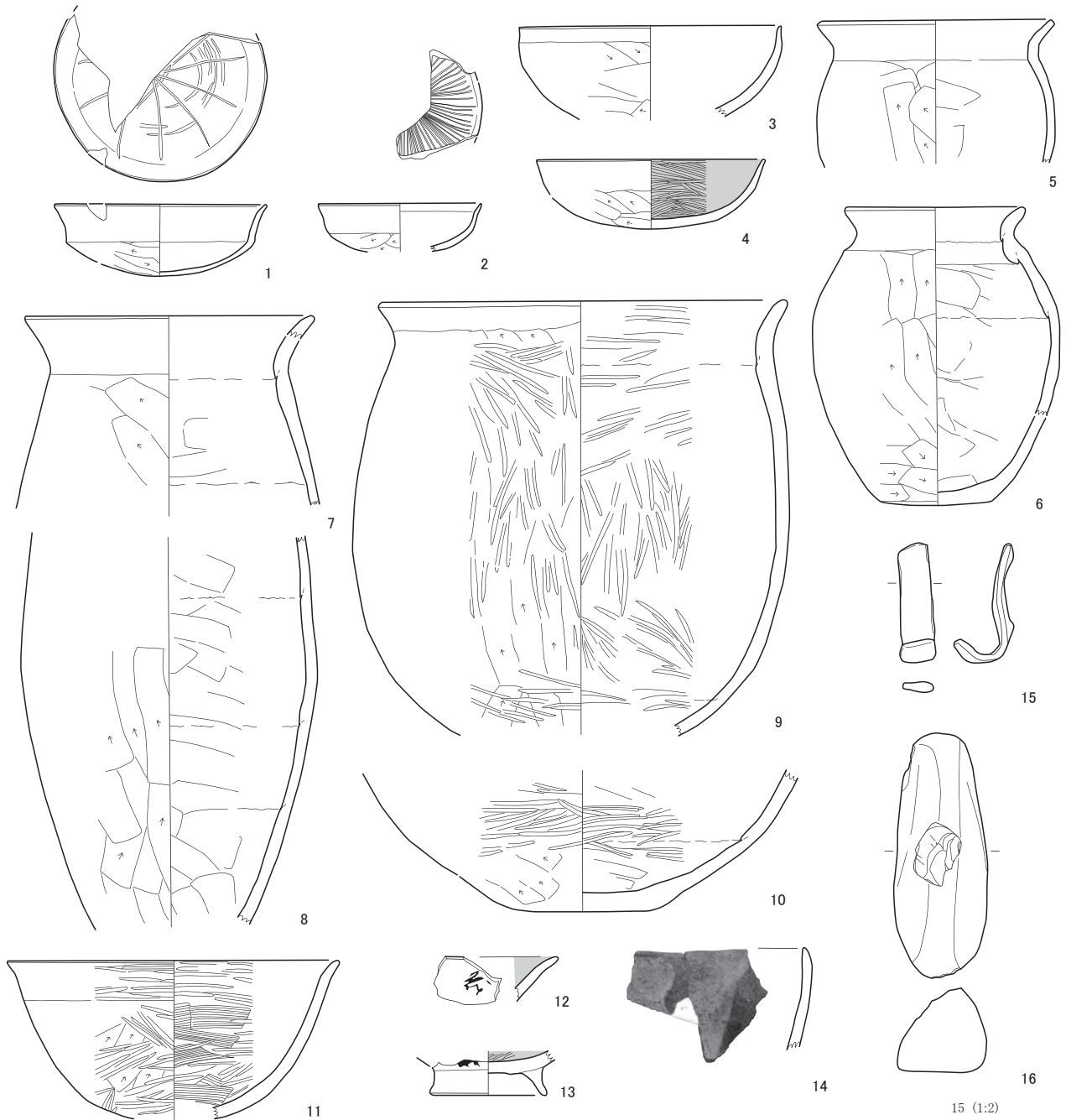
- 1層 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり。粘性弱い。
- 2層 10YR5/6 黄褐色土 しまり・粘性あり。ロームブロックを多く含む。
- 3層 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり。ローム粒子を多く含む。
- 4層 10YR3/1 黒褐色土 しまり・粘性あり。
- 5層 10YR5/8 黄褐色土 しまり・粘性ややあり。粘土ブロックを少量含む。
- 6層 10YR3/4 暗褐色土 しまり・粘性弱い。焼土・炭化物を含む。
- 7層 2.5YR4/8 赤褐色土 しまり・粘性弱い。よく焼けている。
- 8層 10YR7/4 にぶい黄橙色土 しまり・粘性あり。粘土層
- 9層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまり非常にあり。粘性弱い。小石を多く含む。粘土ブロックを含む。

第11図 H8号住居址実測図

(8) H8号住居址

本址は東側調査区西よりで検出された。H9号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は方形である。規模は、東壁3.48m・南壁3.50m・西壁3.32m・北壁3.90mである。壁深さは北東コーナーで0.65mを測る。住居主軸方位は東カマドを基準にN-72°-Eを示す。床は中央部分が特に硬質で、全体に貼床が施されていた。ピットは1か所検出された。規模はP1が径0.40m・深さ0.26mを測る。住居址掘方は住居中央が一段高くなる掘方で、西壁際に深さ0.17~0.19mのピット状の落ち込みが検出された。

カマドは北壁中央と東壁北よりで検出された。東壁カマドが住居の最終使用カマドと考えられ、煙道部が残存していた。袖は白色粘土で構築され、火床部は非常によく焼けていた。北壁のカマドは煙道が長くのびるタイプのカマドであり、袖等の構築物は撤去され、煙道部も埋戻しのような堆積状況であった。



第12図 H8号住居址出土遺物実測図

本址からの出土遺物はやや多く、16点を図示した。1～4は土師器坏である。1と2はいわゆる「須恵器模倣坏」であり、3と4は律令系の坏である。5と6は土師器の小型甕である。7と8は甕で同一個体と考えられるが接合点が見いだせない。9は土師器甕として捉えたが、鉢や壺といった器種の可能性もある。あらいミガキが施されている。11は鉢であり、丁寧なミガキが施されている。12と13は本址に伴わないが墨書土器であったため図示した。どちらも判読はできない。14は縄文後期堀之内式の深鉢破片と考えられる。15は鉄製品で用途は不明である。16は叩き石で3か所に叩き痕が確認できる。

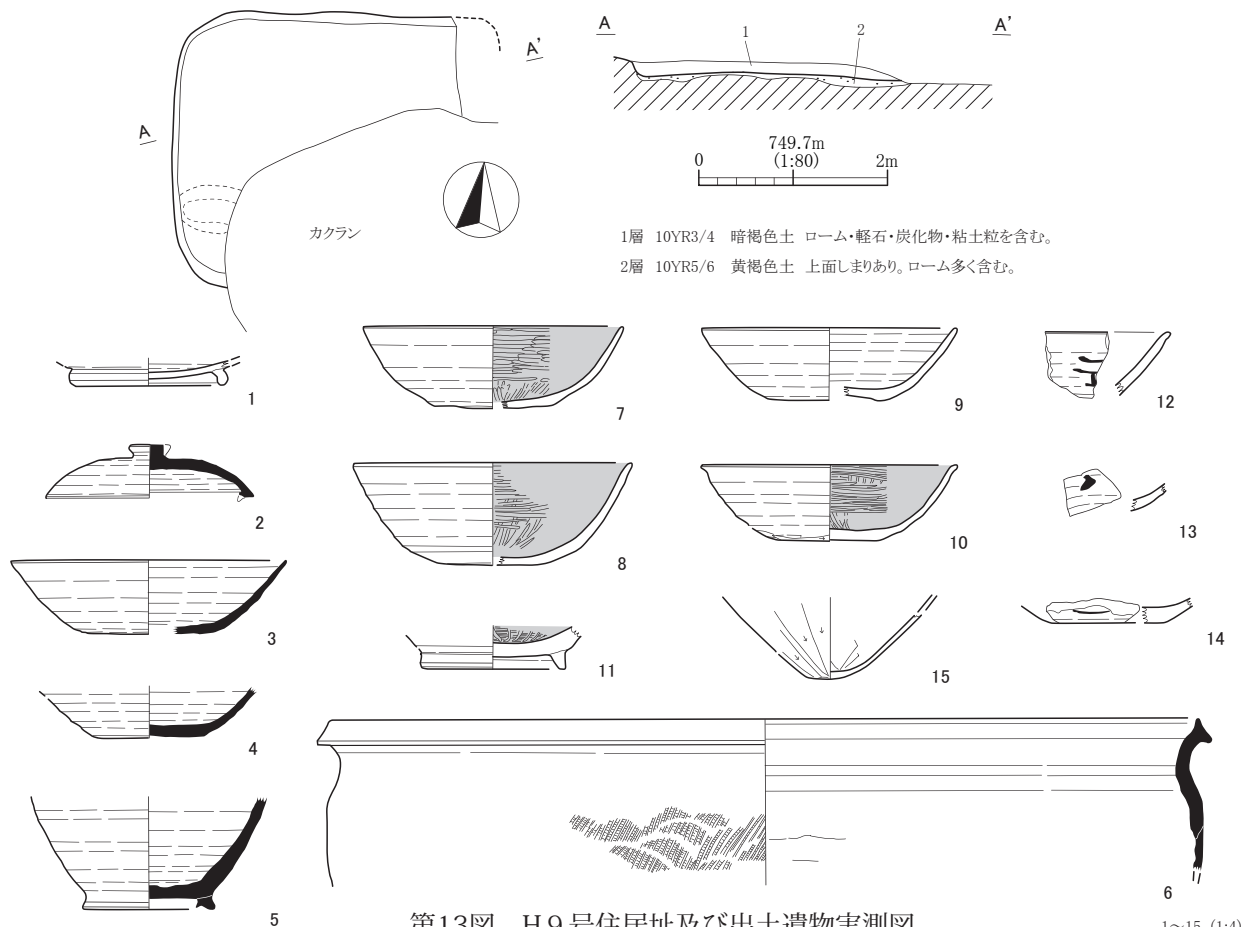
本址はこれらの出土遺物から古墳時代後期(7世紀代)の所産と考えられる。

(9) H9号住居址

本址は東側調査区中央で検出された。形態は東西方向に長軸を持つ長方形と考えられるが、東側部分が地形により削平されており詳細は不明である。規模は西壁が2.62m、北壁は残存長で2.70mである。床面積は残存部分で4.20㎡を測る。壁深さは北西コーナーで最大0.10mを測る。住居主軸方位は推定でNを示す。床は全体に軟質で、貼床が施されていた。ピットは確認されなかった。

本址からの出土遺物はやや多く15点を図示した。1は灰釉陶器碗で底部のみの残存である。内外面に施釉が確認でき、見込み部は非常に擦れている。2は須恵器蓋で、蓋端部にかえりの残るタイプのものである。3と4は須恵器坏である。どちらも底部は回転糸切りである。5は須恵器壺の胴部から底部、6は須恵器甕で口縁部から胴部の破片である。胴部外面に叩き痕を残す。7から10は土師器坏で、7・8・10は内面に黒色処理が施されている。9は色調が褐色で土師器としたが、形態的には須恵器作成技法であり、須恵器とするべきものかもしれない。11は土師器碗で、内面を黒色処理している。12から14はいずれも土師器坏の外面に墨書やい墨痕が認められるものである。いずれも小片で判読はできない。15は土師器甕である。

これらの出土遺物から、本址は平安時代前半(9世紀代)の所産と考えられる。



第13図 H9号住居址及び出土遺物実測図

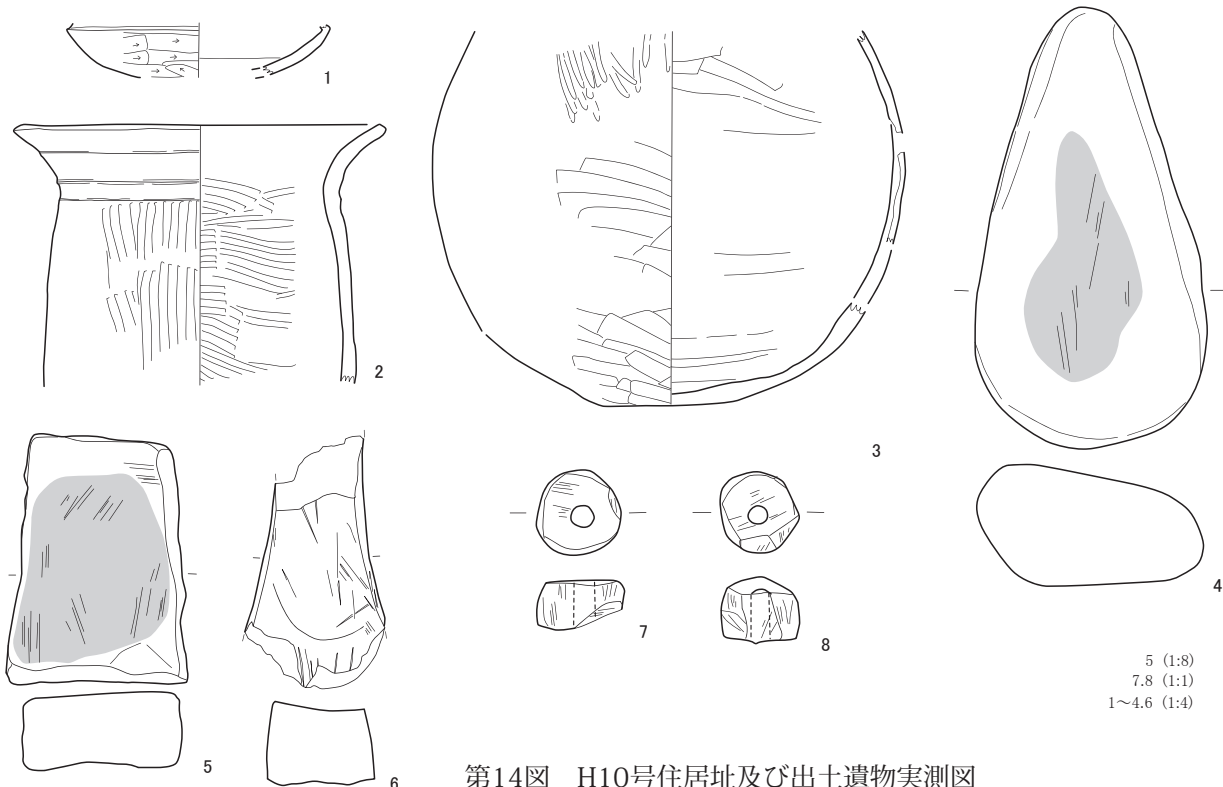
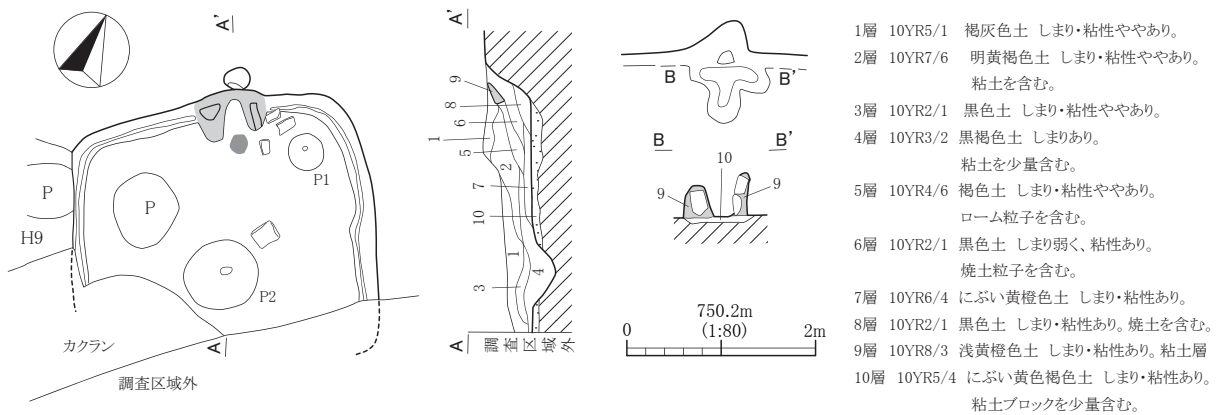
1～15 (1:4)

(10) H10号住居址

本址は東側調査区中央で検出された。形態は長方形と考えられるが住居の南側がカクランと調査区域外となり詳細は不明である。壁深さは北東コーナーで最大0.50mを測る。住居主軸方位は推定でN-25°-Wを示す。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。検出された床部分には壁溝が巡っていた。ピットは床面で2か所検出された。各ピットの規模はP1が径0.37m・深さ0.29m、P2が径0.80m・深さ0.25mを測る。住居址の掘方はほぼ平坦であった。本址のカマドは北壁中央にあり、煙道部がわずかに残存していた。袖部は白色粘土と礫により構築されており、火床部はよく焼けていた。

本址からの出土遺物は検出部分が狭い割には比較的多く、8点を図示した。1は土師器坏で口縁部が欠損している。2は土師器甕で、内外面に刷毛目の残るナデが施されている。3は口縁部が欠損している為、甕か壺の判断に苦慮する。底部に木葉痕がある。内面は比熱の為か剥落している。4は磨り石であり、中央部が擦れている。5は方形の台石で、片面がよく擦られている。6は砥石である。7と8は滑石製白玉で、いずれも中央部に円形の穿孔がある。

本址はこれらの出土遺物から古墳時代後期(6~7世紀代)と考えられる。

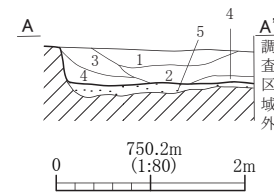
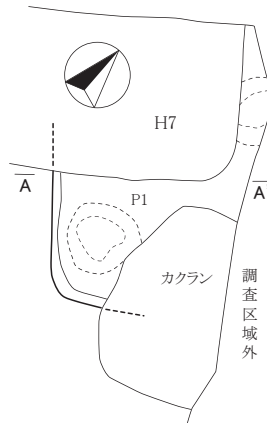


第14図 H10号住居址及び出土遺物実測図

(11) H11号住居址

本址は東側調査区東端で検出された。重複関係はH7号住居址とあり、本址の方が古い。形態は方形と考えられるが、北東側の大部分が調査区域外となるため詳細は不明である。規模は、検出部分で西壁1.3m・南壁0.48mである。壁深さは西壁部分で最大0.39mを測る。住居主軸方位は推定でN-38°-Wを示す。床は全体に硬質で、貼床が施されていた。ピットは掘方時に2か所が検出された。南西コーナーより検出されたP1は規模が径0.74m・深さ0.17mを測る。

本址からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。



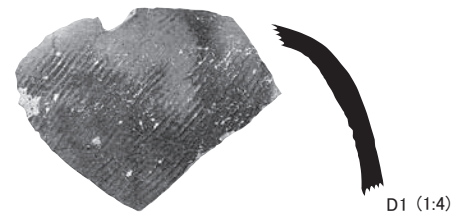
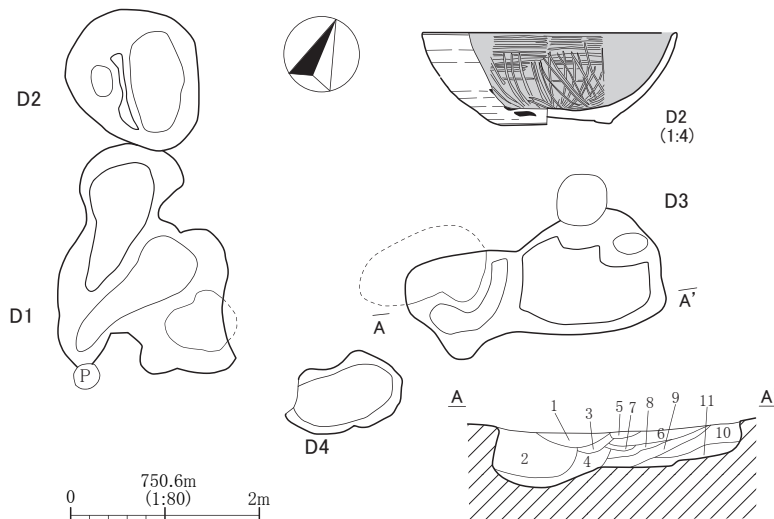
- 1層 10YR3/2 黒褐色土 しまり・粘性ややあり。ロームブロックを多く含む。
- 2層 10YR3/1 黒褐色土 しまり・粘性ややあり。
- 3層 10YR4/6 褐色土 しまり・粘性ややあり。ロームブロックを多く含む。
- 4層 10YR4/6 褐色土 しまり・粘性弱い。
- 5層 10YR7/4 にぶい黄橙 しまりややあり、粘性弱い。

第15図 H11号住居址実測図

2.土 坑

(1) D1～4号土坑

本土坑群は西側調査区中央で検出された。形態はいずれも不整形で、形態より粘土採掘坑と考えられる。各土坑規模は以下の通りである。D1は 長軸2.60m・深さ0.55m。D2は長軸1.55m・深さ0.62m。D3は長軸2.70m・深さ0.90m。D4は 長軸1.28m・深さ0.36mである。D1からは須恵器甕破片が、D2からは墨跡が確認できる土師器坏が出土している。



- 1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム・軽石を含む。
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 白色粘土をやや多く含む。ローム・軽石を含む。
- 3層 7.5YR3/2 黒褐色土 白色粒子・焼土をやや多く含む。
- 4層 10YR5/4 にぶい褐色土 粘性のあるローム主体。
- 5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム・粘土を少量含む。
- 6層 7.5YR3/2 黒褐色土 白色粒子・赤色ローム・軽石を含む。
- 7層 10YR3/4 暗褐色土 ロームやや多い。白色粘土を含む。
- 8層 10YR2/3 黒褐色土 ローム・白色粘土粒を少量含む。
- 9層 10YR4/2 灰黄褐色土 白色粘土を多量に含む。
- 10層 10YR2/2 黒褐色土 白色粘土・ローム・軽石を少量含む。
- 11層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 ローム・白色粘土を主体。黒褐色土を含む。

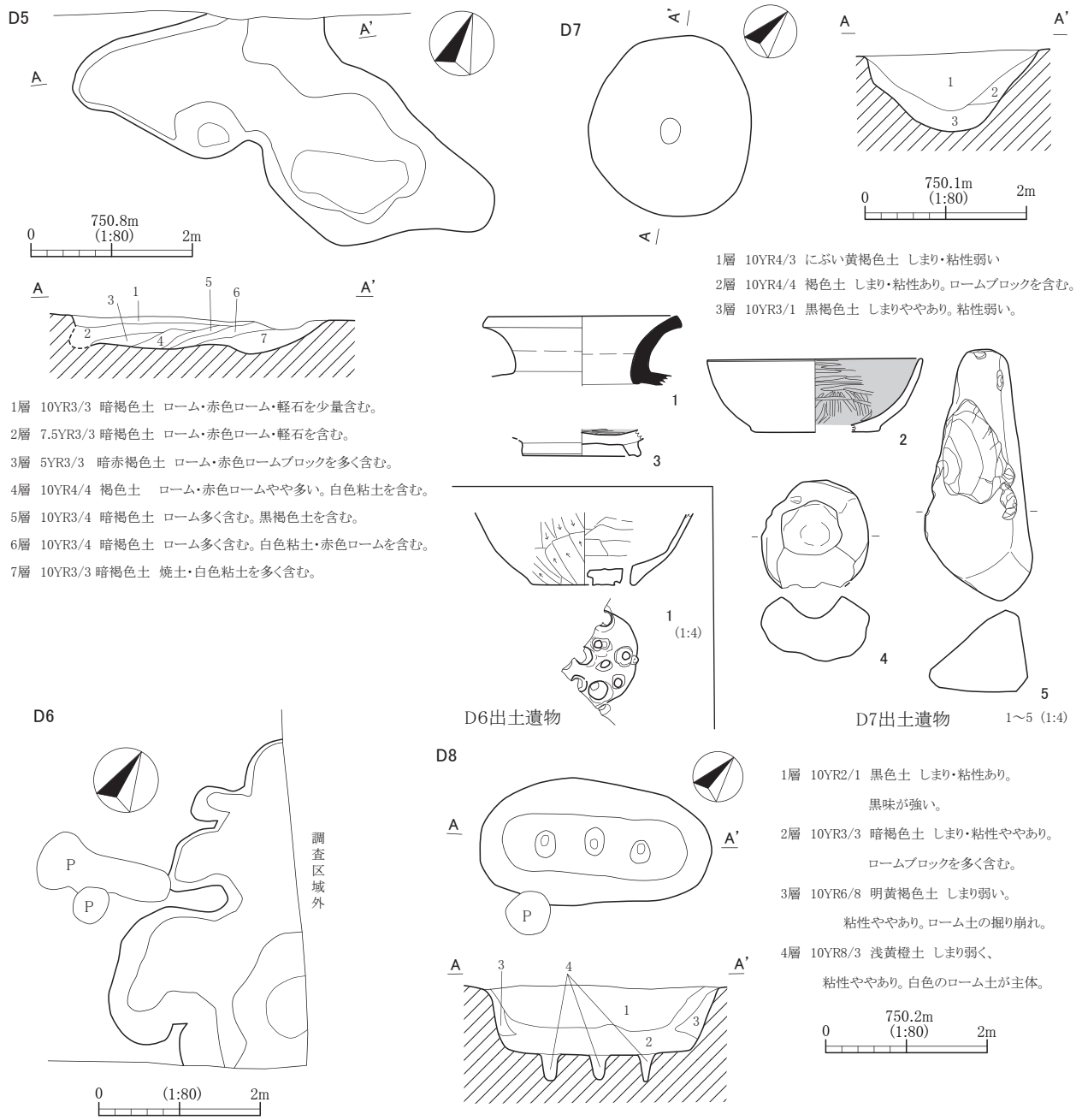
第16図 D1～4号土坑実測図

(2) D5号土坑

本址は西側調査区の北よりで検出された。H4号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は不整形で、規模は長軸5.42m・深さ0.90mを測る。底面は凹凸が激しく、粘土層が堆積している部分は、横方向にえぐる状態で掘削が行われていた。これらの事から本土坑も粘土採掘坑と考えられる。本址からの出土遺物は少なく、須恵器壺2点、土師器甕10点のいずれも小片があったのみである。

(3) D6号土坑

本址は西側調査区の南東端で検出された。形態は不整形である。底面は凹凸が激しく、粘土層が堆積している部分は、横方向にえぐる状態で掘削が行われていた。これらの事から本土坑も粘土採掘坑と考えられる。本址からの出土遺物は少なく、土師器坏2点、土師器甕6点のいずれも小片があったのみである。



第17図 D5～8号土坑及び出土遺物実測図

(4) D7号土坑

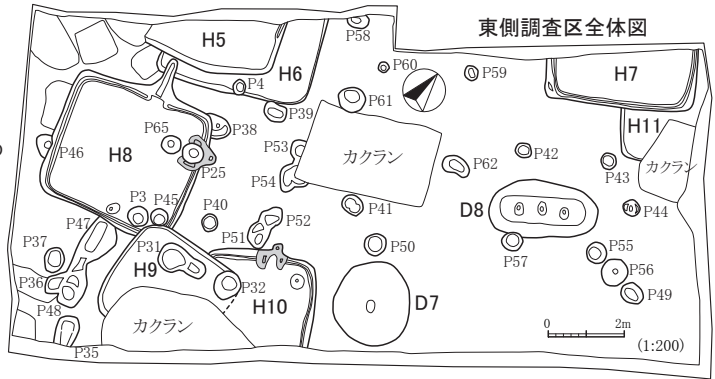
本址は東側調査区の中央で検出された。形態は円形で、規模は径2.24m・深さ1.17mを測る。底面はすり鉢状を呈しており、覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物はいずれも小片で図示できなかったがいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕片が多く出土した。

(5) D8号土坑

本址は東側調査区の東よりで検出された。形態は楕円形で、長軸方位はN-55°-Eを測る。規模は長軸2.90m・短軸1.56m・深さ0.84mを測る。土坑底面には3か所のピットが確認され、規模は径0.58～0.70m・深さ0.37～0.48mを測る。これらの形態から、本土坑はいわゆる「落とし穴」と呼ばれるものと考えられる。本址からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。

3.ピット列及び単独ピット

今回の発掘調査では一か所のピット列と67か所の単独ピットを検出した。これらの内、P14・16.63やP31.3247.48等は掘立柱建物址になる可能性も指摘できるが、調査範囲の制約から確証は得られなかった。単独ピットの形態は円形が多く、柱痕などが確認できるものはなかった。



4.調査の成果

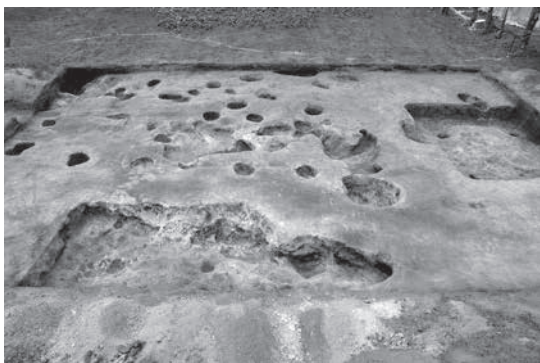
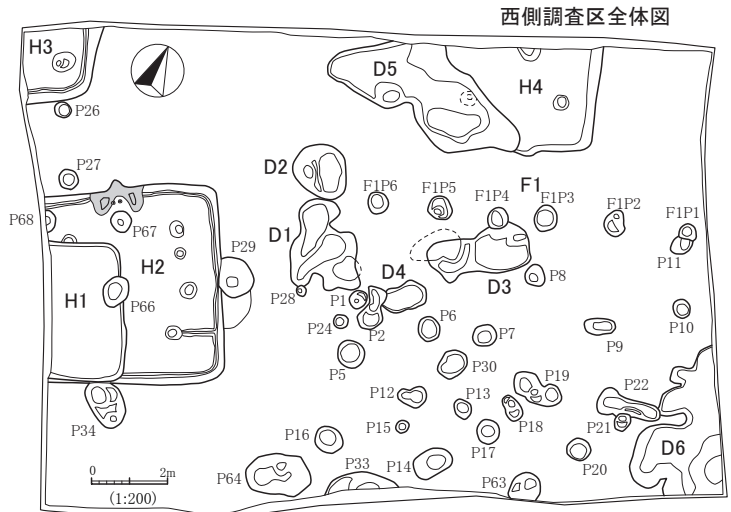
今回の発掘調査は386㎡という限られた範囲での調査であったが、上信越自動車道路及び市道建設時の発掘調査により、不整形であるが大量の須恵器等が出土し、溝の内部が「郡衙」の候補地とされた大溝に囲まれる範囲内であった為、成果に注目があつまった。

結果、「郡衙」を想定し得るような遺構・遺物は発見されなかった。溝で区画された範囲は直径240mであり、今回の調査成果が、郡衙候補地の当落を判断するにはあまりにも狭小であることは理解している。尚且つ、北に隣接する田切は現在でも成長を続けており、古代の景観がどのようになっていたかは不確実な部分の方が大きい。

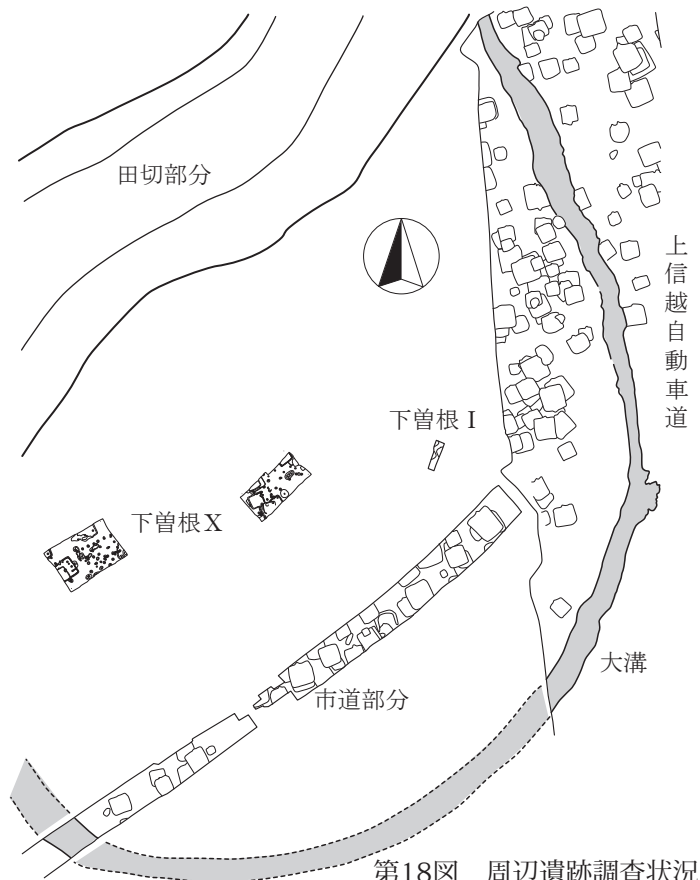
しかし、「正倉」「郡庁」「館」「厨」などの施設が立ち並ぶであろう郡が推定地にしては、通常の竪穴住居址が混在する事や、今回調査された粘土採掘坑の存在が気にかかる。

今後は今回の調査成果も含め、大溝内と外の時期別の住居分布や掘立柱建物址の配置などを考察し、事実に基づくことが必要であろう。

以上雑駁であるがまとめとしたい。



西側調査区の粘土採掘坑



第18図 周辺遺跡調査状況

第1表 ヒット計測表

単位cm

No.	形態	径	高さ	土説	出土遺物	No.	形態	径	高さ	土説	出土遺物
F1P1	-	45	41		土師甕3	P32	円形	55	47	10YR3/1	須恵坏1、土師甕1
F1P2	不整形	70	54		須恵坏1、土師甕4	P33	-	145	88	10YR3/1	須恵坏2、土師坏内黒2・甕2
F1P3	円形	67	19			P34	不整形	135	46	10YR3/1	須恵坏1・甕1、土師坏1・甕2
F1P4	円形	52	39		須恵坏1、土師坏1・甕1	P35	-	55	43	10YR3/1	須恵蓋14・坏2・甕1、土師甕1
F1P5	円形	68	44			P36	-	(45)	42	10YR3/1	
F1P6	円形	57	30		土師坏1、土師甕4	P37	-	65	34	10YR3/1	須恵坏1
P1	円形	56	28		須恵坏1・甕1	P38	-	61	44	10YR3/1	土師坏内黒2・甕2
P2	不整形	110	22			P39	楕円形	63	36	10YR3/1	須恵蓋1、土師甕2(武蔵)
P3	円形	55	53	10YR3/1	土師坏4・甕2	P40	円形	48	37	10YR3/1	
P4	円形	43	24	10YR3/1		P41	不整形	59	35	10YR3/1	
P5	円形	72	45	10YR3/1	須恵甕1、土師甕2	P42	円形	38	16	10YR3/1	
P6	楕円形	64	27	10YR3/1		P43	円形	40	14	10YR3/1	
P7	楕円形	63	33	10YR3/1	土師甕1	P44	円形	47	21	10YR3/1	
P8	楕円形	60	29	10YR3/1		P45	円形	50	76	10YR3/1	土師甕1
P9	楕円形	86	14	10YR3/1		P46	-	63	35	10YR3/1	
P10	円形	49	23	10YR3/1		P47	不整形	(120)	49	10YR3/1	須恵坏8・甕3、土師甕5・坏内黒7
P11	-	53	30	10YR3/1		P48	不整形	95	91	10YR3/1	須恵坏1・甕、土師甕6
P12	不整形	80	29	10YR3/1		P49	楕円形	60	29	10YR4/1	
P13	楕円形	55	18	10YR3/1		P50	円形	63	18	10YR3/1	
P14	楕円形	105	53	10YR3/1	土師甕1	P51	不整形	75	35	10YR4/1	土師甕1
P15	円形	35	25	10YR3/1	須恵蓋1	P52	不整形	64	40	10YR4/1	
P16	円形	75	49	10YR3/1		P53	不整形	55	35	10YR4/1	
P17	円形	67	47	10YR3/1	土師甕3(古墳)	P54	不整形	95	31	10YR4/1	
P18	不整形	71	46	10YR3/1	須恵甕1	P55	円形	56	35	10YR2/1	土師甕1
P19	不整形	130	40	10YR3/1	須恵坏1、土師甕2	P56	円形	69	46	10YR4/1	
P20	円形	61	36	10YR5/1		P57	円形	54	28	10YR2/1	
P21	円形	46	34	10YR3/1		P58	-	45	30	10YR2/1	
P22	不整形	168	46	10YR3/1	須恵高台坏	P59	楕円形	40	13	10YR2/1	
P23	欠番			10YR3/1		P60	円形	38	6	10YR2/1	
P24	円形	35	13	10YR3/1		P61	円形	73	47	10YR4/1	須恵蓋1・坏5、土師甕6
P25	円形	65	66	10YR3/1	土師甕	P62	不整形	75	25	10YR3/1	
P26	円形	40	22	10YR3/1		P63	-	90	48	10YR3/1	須恵坏1、土師甕1
P27	円形	50	29	10YR3/1		P64	-	172	85	10YR3/1	須恵坏2・甕1、土師坏6・甕10
P28	円形	27	19	10YR2/1		P65	円形	48	44	10YR3/1	
P29	-	108	90	10YR3/1	土師甕	P66	不整形	83	59	10YR3/1	
P30	不整形	81	42	10YR3/1	土師甕3	P67	円形	56	48	10YR3/1	
P31	不整形	150	49	10YR3/1	須恵坏4・甕1、土師坏2・甕1	P68	-	55	55	10YR3/1	

「出土遺物」の数字は小片を数えた数

第2表 出土遺物観察表

H1	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値() 残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
1	須恵器	有台坏	(17.0)	11.4	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測				
H2	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値() 残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
1	須恵器	蓋	(9.2)	-	<1.8>	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	回転実測			Ⅲ区・カマド	
2	須恵器	有台坏	-	9.6	<1.4>	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測 みこみ部磨耗			Ⅳ区	
3	土師器	坏	(12.4)	(10.1)	<3.2>	ヨコナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	回転実測			H2 H1	
4	土師器	坏	(14.0)	(14.2)	<4.0>	みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	回転実測			Ⅲ区	
5	土師器	坏	(16.0)	-	4.2	みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	完全実測 外面磨耗			Ⅳ区	
6	土師器	武蔵甕	22.4	-	<28.0>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測			No.1 Ⅰ区・Ⅳ区	
7	土師器	武蔵甕	(23.9)	-	<8.1>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測			Ⅰ区・カマド	
8	土師器	甕	(18.4)	-	<15.8>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測			Ⅲ区・H1	
9	土師器	武蔵甕	(19.5)	-	<21.9>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測 外面磨耗			Ⅰ区・Ⅲ区 Ⅳ区	
10	土師器	球胴甕	-	7.8	<3.1>	ヘラナデ	ナデ後ミガキ	完全実測	木葉痕あり		Ⅳ区	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	内 面		外 面		備 考	出土位置
11	石器	白玉	<1.3>	<1.5>	<0.5>	1.53	孔径 0.3	<石材>	<被熱>なし	約1/2欠損		検出
12	石器	白玉	1.6	1.65	0.6	2.57	" 0.4		"	正面 側面に擦痕		Ⅲ区
13	石器	白玉	1.4	1.75	0.7	1.87	" 0.3		"	正面 側面に擦痕		Ⅳ区
14	鉄製品	鐵	3.3	2.6	0.2	3.36				短頭鐵		Ⅲ区
15	鉄製品	不明	<2.9>	<0.9>	<0.3>	2.35				下部欠損		Ⅲ区

第3表 出土遺物観察表

H4	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
1	土師器	坏	(14.2)	(13.4)	<3.5>	ミガキ→黒色処理		口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ→ミガキ		回転実測 外面磨		
2	土師器	(球胴)甕	(20.3)	-	<7.0>	口縁ヨコナデ 胴部ヘラナデ→口縁ミガキ		ミガキ		回転実測 磨耗		
3	土師器	武蔵甕	(25.4)	-	<12.9>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ		口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		回転実測	ホリ	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	内 面		外 面		備 考	出土位置
4	石器	軽石製品	7.6	6.4	2.4	5.62			なし		正裏に穿孔(錘の未製品か)正面に条痕	H4
H8	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
1	土師器	坏	13.4	11.9	4.5	ナデ→暗文		底部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ			IV区	
2	土師器	坏	(10.4)	(9.0)	<3.0>	ナデ→暗文 口縁ヨコナデ		底部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ			OSS X H8 OSS IV H8	
3	土師器	坏	(16.5)	(16.6)	<5.7>	ナデ 口縁ヨコナデ		底部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ			IV区 東カマド	
4	土師器	坏	(14.4)	(13.0)	<4.4>	ヘラミガキ→黒色処理		底部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ			No.1	
5	土師器	小型甕	(15.0)	-	<9.0>	ヘラナデ 口縁ヨコナデ		ヘラケズリ 口縁ヨコナデ			IV区	
6	土師器	甕	(11.4)	7.0	(18.8)	ヘラナデ 口縁ヨコナデ		体→底部 ヘラケズリ 口縁ヨコナデ		破片を図上で復元	I区、II区、III区 東カマド	
7	土師器	甕	(18.2)	-	<12.5>	ヘラナデ 口縁ヨコナデ		ヘラケズリ 口縁ヨコナデ		⑧と同一個体	IV区 東カマド	
8	土師器	甕	-	-	<24.8>	ヘラナデ		ヘラケズリ		⑦と同一個体	IV区	
9	土師器	甕	25.8	-	<27.4>	ヘラミガキ		ヘラケズリ→ヘラミガキ 口縁ヨコナデ			III区、IV区 P51	
10	土師器	壺	-	9.0	<8.8>	ヘラナデ→ヘラミガキ		ヘラケズリ→ヘラミガキ 底部ヘラケズリ			IV区	
11	土師器	鉢	(21.0)	-	<9.9>	ハケ目→ヘラミガキ		ヘラケズリ→ヘラミガキ			II区、IV区、カマド	
12	土師器	鉢?	-	-	-	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理		ロクロナデ 墨書「ロ」不明			I区	
13	土師器	皿?	-	7.4	<2.8>	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理		ロクロナデ 底部回転糸切り→付高台		墨書「ロ」不明	I区	
14	縄文	鉢	-	-	-	ヘラケズリ→ナデ		ヘラケズリ→ナデ		後期、堀の内	IV区、カマド	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	内 面		外 面		備 考	出土位置
15	鉄製品	不明	3.8	1.1	0.5	5.23						III区
16	石器	敵石	15.5	6.0	5.6	610.00					正面と縁辺に敵打痕	III区
H9	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
1	灰釉陶器	碗	-	8.4	<1.5>	ロクロナデ 内面研磨		ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付		完全実測	II区	
2	須恵器	蓋	-	(2.2)	<2.8>	ロクロナデ		ロクロナデ→つまみ、返り貼付 自然袖付着		回転実測	II区	
3	須恵器	坏	(14.6)	(7.0)	3.9	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転糸切り		回転実測	I区、II区	
4	須恵器	坏	-	(6.0)	<2.7>	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転糸切り(右)		完全実測	II区 H8 I区	
5	須恵器	壺	-	(6.8)	<6.0>	ロクロナデ		ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付 自然袖付着		回転実測	II区	
6	須恵器	甕	(45.6)	-	<8.8>	ロクロナデ		ロクロナデ→胴部タタキメ		回転実測	II区	
7	土師器	坏	(13.8)	6.2	4.3	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ 底部回転糸切り(右)		完全実測	II区	
8	土師器	坏	(14.8)	(5.7)	5.4	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ→底部と底部外周回転ヘラケズリ		回転実測	II区	
9	土師器	坏	(13.6)	(6.4)	3.8	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転糸切り(右)		回転実測	II区 H8 I区 H10ケン	
10	土師器	坏	(13.6)	5.3	4.0	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ→底部と底部外周 ヘラケズリ		完全実測	II区	
11	土師器	碗	-	7.4	<2.3>	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付		完全実測	I区	
12	土師器	坏	-	-	-	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ 墨書あり		破片実測	II区	
13	土師器	坏	-	-	-	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ 墨書あり		破片実測	II区	
14	土師器	坏	-	(5.9)	<1.3>	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ→底部糸切り 墨書あり		回転実測	II区	
15	土師器	武蔵甕	-	2.0	<4.4>	ヘラナデ		胴部ヘラナデ 底部ヘラナデ		完全実測	I区 II区	
H10	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
1	土師器	坏	-	(13.8)	<2.9>	みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ		口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ		回転実測	I区、カマド	
2	土師器	甕	(19.6)	-	<13.7>	口縁ヨコナデ→胴部ハケメ		口縁ヨコナデ→胴部ハケメ		回転実測	I区	
3	土師器	球胴甕	-	7.2	<19.8>	ヘラナデ		ナデ、ミガキ 底部 木葉痕		完全実測 内面剥離	I区、II区	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	内 面		外 面		備 考	出土位置
4	石器	磨石	23.4	12.3	7.3	2140.00			あり(一部黒褐色化)		正面にすり面	カマド
5	石器	台石	26.6	19.3	9.0	-			なし		正面にすり面 条痕あり	No.1
6	石器	砥石	<13.4>	<7.4>	<5.2>	450.00			なし		上下～裏面 欠損 砥面数3 正面に条痕のこる	II区
7	石器	白玉	1.15	1.15	0.6	1.15	孔径 0.3			なし	正裏・側面に擦痕あり	II区
8	石器	白玉	1.1	1.1	0.9	1.28	孔径 0.25			なし	正裏・側面に擦痕あり	II区
D1~7	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●		
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置	
D1	須恵器	甕	-	-	-	当て具痕		タタキメ		断面実測 拓本	D1	
D2	土師器	坏	(13.6)	6.3	4.9	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ→底部回転糸切り(右) 墨書あり		完全実測	D2	
D6	土師器	コシキ(多孔)	-	(6.4)	<4.5>	ヘラナデ		胴部ヘラケズリ・底部ナデ→焼成前穿孔		回転実測	D6	
1	須恵器	甕	(11.7)	-	<4.3>	ロクロナデ		ロクロナデ		内外自然袖	D7	
2	土師器	坏	(13.3)	(8.0)	<4.5>	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理		ロクロナデ 底部 回転糸切り			D7	
3	土師器	碗	-	7.3	<1.7>	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理		ロクロナデ 底部切り離し→付高台			D7	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	内 面		外 面		備 考	出土位置
4	石器	凹石	<6.7>	6.6	高さ4.2	61.66	凹径(3.7) 凹深1.3		"		一部欠損	D7
5	石器	敵石	15.6	6.6	5.0	500.00			"		後縁上と端部に敵打痕	D7



H1号住居跡



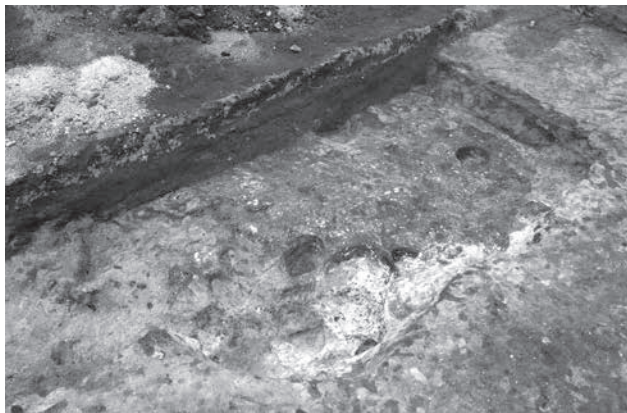
H3号住居跡



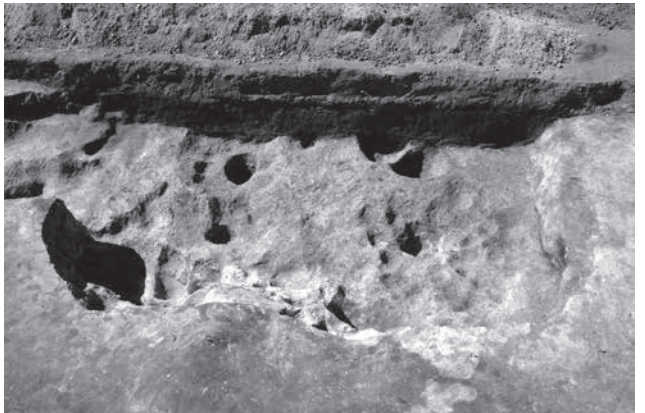
H2号住居跡



H2号住居址カマド



H4号住居跡



H4号住居跡掘方



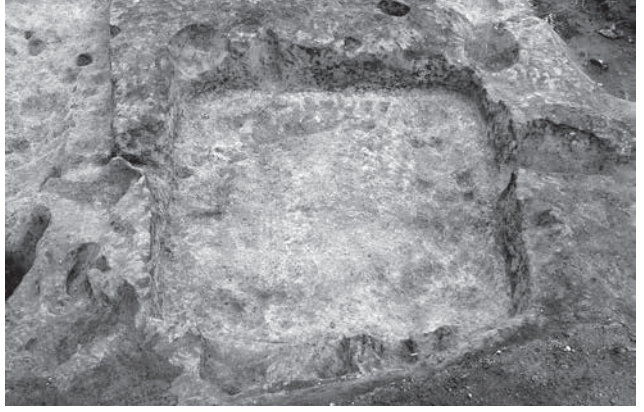
H5・6号住居跡



H7号住居跡



H8号住居址



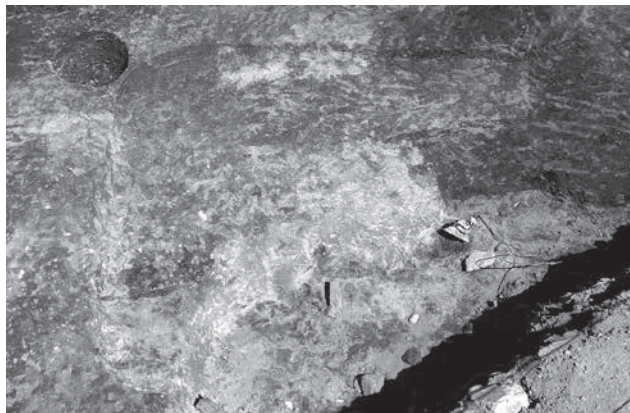
H8号住居址掘方



H8号住居址カマド



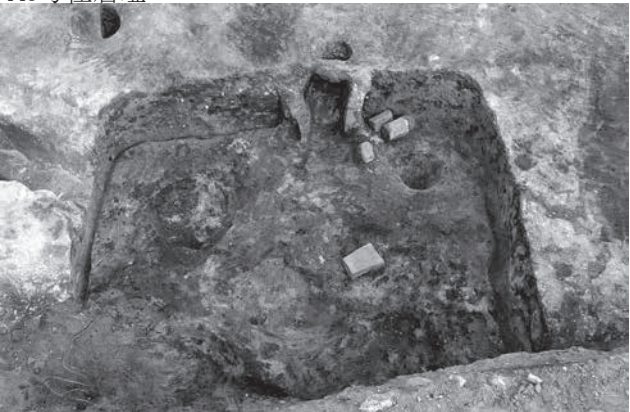
H8号住居址北壁カマド



H9号住居址



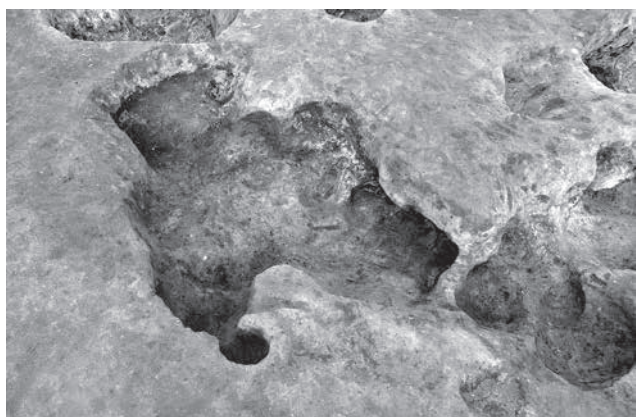
H11号住居址



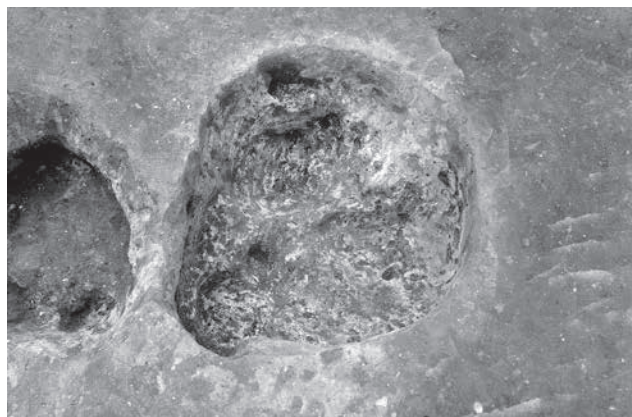
H10号住居址



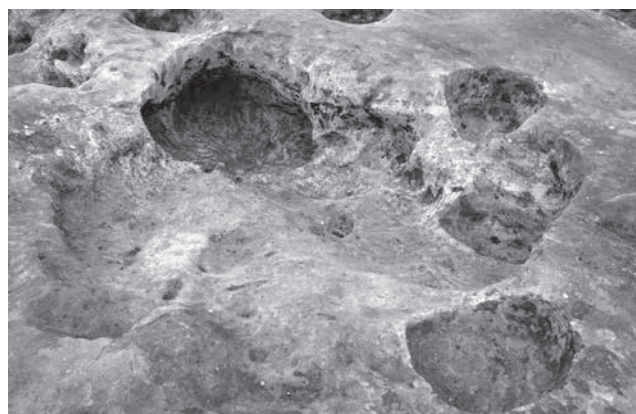
H10号住居址



D1号土坑



D2号土坑



D3号土坑



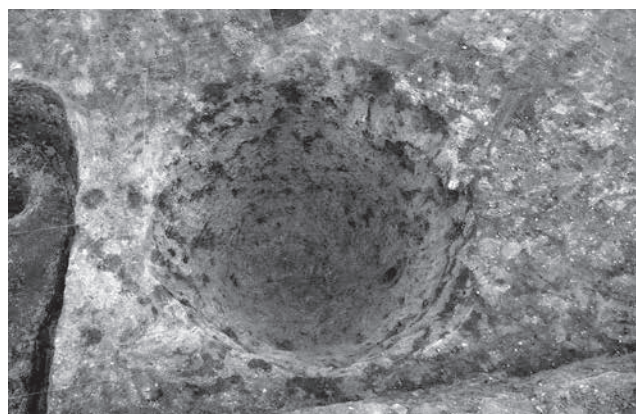
D4号土坑



D5号土坑



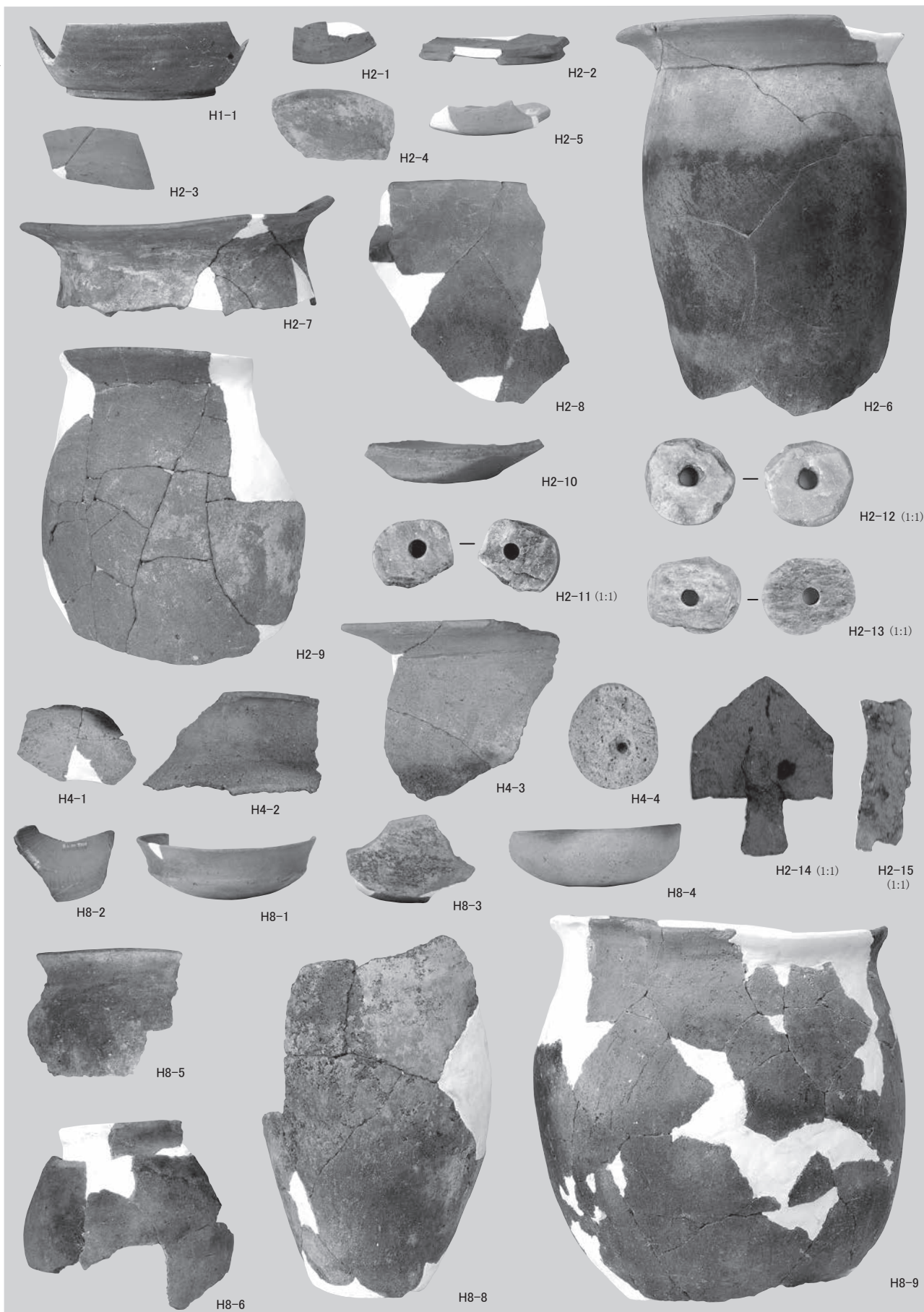
D6号土坑

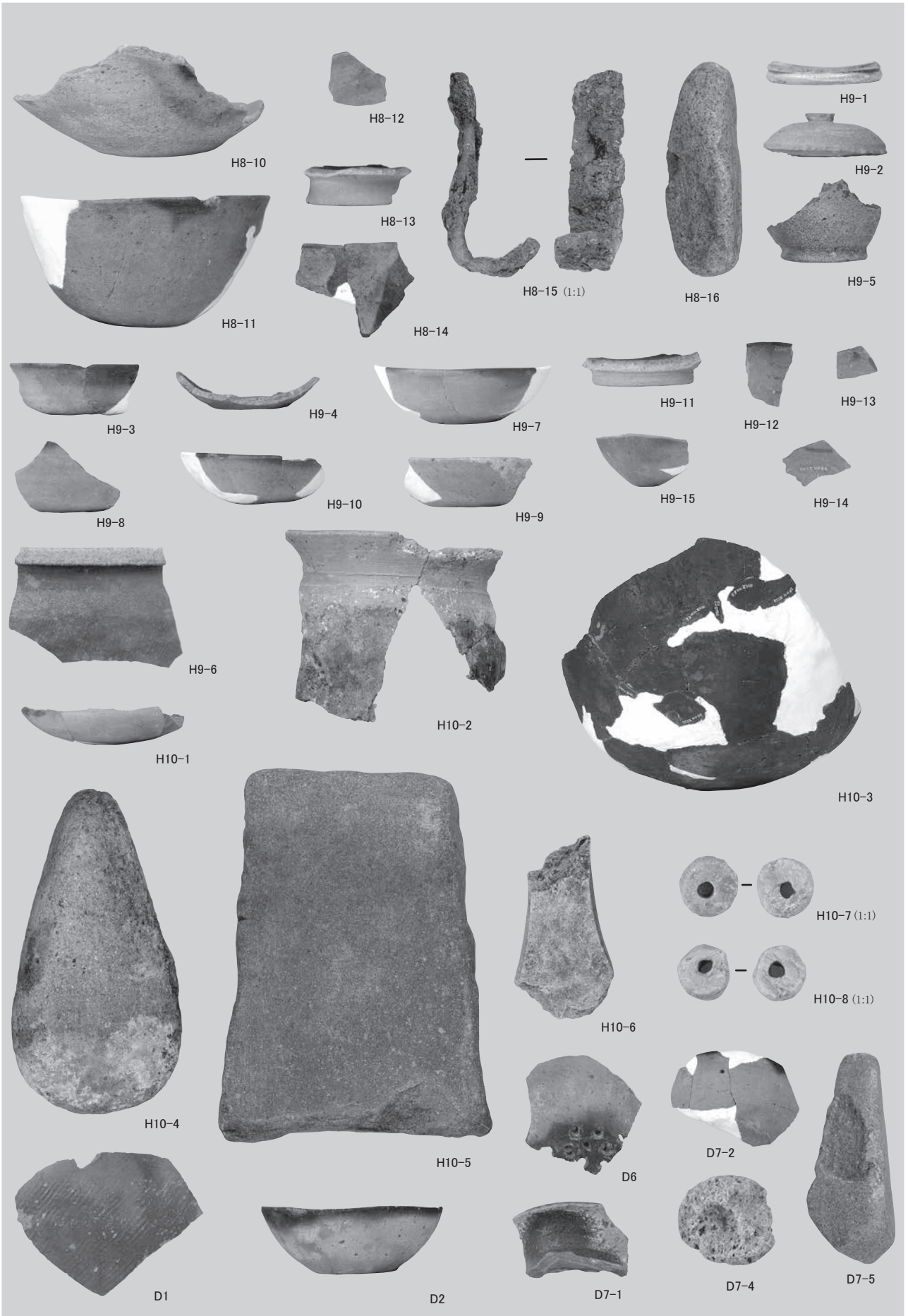


D7号土坑



D8号土坑





報告書抄録

ふりがな	しばみやいせきぐん しもそねいせきじゅう							
書名	芝宮遺跡群 下曽根遺跡X							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第241集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市志賀5953 TEL0267-68-7321 FAX0267-68-7323							
発行年月日	平成28年(2016)12月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しばみやいせきぐん しもそねいせきじゅう 芝宮遺跡群 下曽根遺跡X	さくしおたい 佐久市小田井 39-1他	20217	8	36° 17.36	138° 28.50	20160405 ～ 20160418	386	社屋建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
芝宮遺跡群 下曽根遺跡X	集落址	古墳 奈良 平安	住居址 11軒 ピット列 1基 土坑 8基		土師器・須恵器 石器・石製模造品 鉄製品			
要 約	台地上に展開する古墳時代から平安時代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に高い密度で竪穴住居が展開することが確認された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第241集

芝宮遺跡群 下曽根遺跡X

平成28年(2016) 12月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化振興課 文化財事務所

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司